

俳句雑誌

空

空

令和2年9月30日発行

第18巻4号

通巻第92号



2020・9

SORA 92号

北九州 兒玉充代

山川の流速すでに夏のもの
 大木の影のたしかさ夏来たる
 腕組めば思惟のところに若葉寒
 草いきれ犬にもありて聡き貌
 夕かげるころの視力や走り梅雨

大阪 田岡千草

初つばめ前撮りといひ婚衣裳
 高きより嬬る人なき黒揚羽
 遊興のはなし立消え春惜しむ
 首洗池の冥さや亀の鳴く
 八十八夜畑と隣るうから墓

兵庫 林徹也

廃校の窓を残して蔦若葉
 黒南風や耶蘇の名並ぶ島の墓
 息深く大輪の薔薇剪りにけり
 紅薔薇の一ひら挿む黙示録
 談判のことば途切るる薄暑かな

長崎 仲里奈央

二本目の映画鑑賞春深し
 ゴールデンウィーク夫の初料理
 昏がりに隠す気まづさ夕螢
 野苺や少女に戻つてゆく母よ
 週末も不在の父や若葉雨

北へ州 横田敬子

マスク縫ふミシンの音や春の暮
 問診は病院の庭薔薇満開
 引き出しは宝の小箱種物屋
 蛇穴を出てウイルスに感染す
 春の草大きく伸びて姉の留守

兵庫 えとう樹里

つつみぽぽたんぽぽぽと野末まで
 遠き日のたましひぬれて螢気楼
 雪割草今日のアルプスやさしくて
 母郷よりつれ来し海老根ここに咲く
 散りぎはの牡丹見てみてふとめまひ

京都 天谷翔子

逃水に溺れて帰り来ぬあなた
 口紅の赤を濃く引く花疲れ
 これを着て逢ひたる人や更衣
 さつきから舳先離れぬ螢かな
 追ひかけてて切りたての薔薇呉るる

福岡 秋津令

二分咲きのままに刈らるる藤の花
 猫の子も交じりてゐたる朝の声
 地球儀を回す指や子供の目
 夏めくやいつもの椅子に母のゐて
 居酒屋の骨の出てる洪団扇

福岡 三井所美智子

骨肉の真白き骨ぞ春の雪
賽銭箱に祖父の名のある涅槃寺
コロナ禍のマスクばかりの親族葬
庭弄り朝な朝なや梅落とす
豆の飯小柄な母の大きな声

兵庫 大西乃子

沈丁の誘ひにのつてしまひけり
切り株の五百年杉ひこばゆる
朝寝してぼんぼん船を聞きぬたり
乳母車しろつめ草に預けをく
卯の花腐し今朝はスクランブルエッグ

東京 今井康子

穂高岳仰ぐ小梨の花眩し
竹籠に置けば草餅落ちつきぬ
門閉ざす老人ホームえこの花
触ることためらふ白さ銀竜草
立ち話してゐることく銀竜草

直方 吉田悦子

雛の唄白寿の母も加はりて
母今日もおだやかな朝桃の花
春立つや嫁入道具の裁ち鋏
産土の山に大きな藤垂るる
青簾夕日やはらぐ母の家

東京 遠山のり子

草原に鳥影速し春帽子
豆の花うつらうつらと寺の鐘
折鶴を並べる窓辺麦の秋
白雲のゆらめく川面夏に入る
夏深し川面に浮かぶ鳥の羽根

兵庫 岡村尚子

風光る流れにまかせ番鳥
葉桜や鈍色の海広ごれる
淡路島典つ正面に春惜しむ
麦の秋二羽の鴉の宥り添へり
アマリリス大きため息つきにけり



空集抄——柴田佐知子抄出

吹き晴れて遠嶺定かや厩出し

原友子

薫風や頷くやうにサラダ食べ

高倉和子

春深し畳みて捨つる父の服

曾根富久恵

蝉の穴どれにも小花挿してみし

中田みなみ

著莪の花青竹の香の笕水

深川淑枝

風を来て風の岬の春祭

戸栗末廣

春泥の道ふるさとを捨てし道

角野良生

ふくれつつ風船色を失へり

”

迷ひ子のやうに一人の花見かな

大西乃子

遠からぬ世に夫のゐて草の餅

石橋幾代

灘風に正気失ふ鯉幟

小林朱夏

さへづりの中のひとつを聞いてをり

山本則男

村人の数より多き案山子かな

苑実耶

寒鴉鳴きに来てゐるだけの湯

坂口学

初夏や冠羽を開く白鸚鵡

永淵恵子

花筏次第に溺れゆくものも

秋千晴

当てずつぼうに手を入れ掴む茗荷の子

吉田菫

春祭久々に着る割烹着

山内碧

音たてて風を捌ける鯉幟

松田明子

老猫のねじれし髭や春深し

岩下きぬ代

動くことやめず灯下の熱帯魚

児玉充代

女王も小娘もをり薔薇の園

青木朋子

母の日の手紙に混じる鏡文字

仲里奈央





着ぶくれし夫が棘あることを言ふ

ウイルスに歪む地球や鳥帰る

啓蟄のごつたがへしてゐる地中

病院食になじめぬ日々や花は葉に

用水路覗けば蛇と目が合ひぬ田

遠足の子の弾みをりあゆみ板

笑ひ声聞こえ夏めく通学路

雨のあと光こぼるる薔薇の園

あちこちに書き留めし句や菜種梅雨

夏帽子まづ太陽へあいさつす

つまづきて独り笑ひや水温む

ものいはぬもとはといへば水喧嘩

塩飴をひとつ含みて田草取り

吉田悦子

押田裕見子

荷宮克代

田代貞香

中とし江

森田明成

矢野綾子

今井康子

後藤園子

松井順子

山田正子

星加鷹彦

横田敬子

椎の花は爆発寸前沼暗し

花吹雪朝日は昇り吾子は死す

持て余す恋五月雨に出刃を研ぐ

薫風や伸びてはちぢむ波の皺

抜く草の細根がなほも抗へり

燃え残る茎も鋤き込む春田かな

ひなげしやことばにすればつまらなく

夏蝶の甘ゆるやうについてくる

ま白なる雲と交信葱坊主

ゆらゆらと新居に慣れし金魚かな

無口なる男に笑窪さくら餅

夏帽子池を覗けば亀寄り来

一句さへ詠めぬ日ばかり夏近し

河原敬子

牧康子

古賀真理

石川子熊

本多トミ

井上和子

えとう樹里

岩井京子

窪みち子

宮川正彦

早田保子

むつみ蓮

本松陽子

空集作品評

柴田佐知子

吹き晴れて遠嶺定かや厩出し 原 友子

雪国の長い冬が終り雪解けの時がやってきた。積雪の為、厩舎から出ることができなかった牛や馬が、明るい日差しへとときはなたれる。へ吹き晴れてくよってたつぷりと早春の日差しが行き渡る。牛馬の生き生きとした眼前の景と、まだ雪を頂く峰々の輝きが春の喜びを美しく描き出している。

薫風や頷くやうにサラダ食べ 高倉 和子

サラダを食べている時の姿を考えてみた。確かにこの句の通りだ。一人で食べていることが多い人のように思える。私も該当者だが…。ちよつと物寂しく可笑しい。思いがけないところを切り取るものだ。

春深し畳みて捨つる父の服 曾根富久恵

亡くなった家族の服はすぐに捨てることができな
い。私もこの頃やつと父のセーターなど一部を捨て
たが、父への思いを捨てているようで切なかった。
へ畳みて捨つるくよって作者の思いが充分に伝わっ
てくる。

ふくれつつ風船色を失へり 角野 良生

紙風船ではないことは勿論明瞭。赤や緑など色鮮
やかなゴム風船だ。幼いころには息を吹き入れる力
が足らず父に膨らませてもらっていた。ふくらんで
ゆく風船は色がやや薄れ、元の色は結んだ吹き口に
残っていた。知つていながら、或は見えていながら詠
んでいないことが身の周りにあまたあるのだと思わ
せられた句である。この句のように真つ直ぐ見て真
つ直ぐ表現したい。

空集

柴田佐知子選



うぐひすや隠居仕事の畝真直ぐ 千葉 原 友子

母の忌の淡くなりゆき豆の花

吹き晴れて遠嶺定かや厩出し

クレソン摘む青年白き脛映し

春林に透きて異国のやうな街

傘寿祝ぎ呉れよげんげを編みくれよ

薫風や頷くやうにサラダ食べ 福岡 高倉和子

日傘より波立ち上がる砂丘かな

風の音変はりてきたる袋掛

人通る幅を残して梅を干す

蠅叩き探す間に蠅見失ふ

風鈴の音消す雨となりにけり

桜鯛歯並びまでも美しき

音たてて軒に落ちたる恋雀

春深し畳みて捨つる父の服

夕薄暑廊下も使ふ書の整理

蜷の道土の湿りに尽きにけり

禅問答のごとき会話や棕櫚の花

雲海やすべては白で始まりぬ

河骨や二枚の歩板の間も

師の忌くる無駄花も無く茄子育ち

あつけなく夕餉終りぬとろろ飯

蟬の穴どれにも小花挿してみし

直方 曾根富久恵

東京 中田みなみ